

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-131	A-132	13-111 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Prenatal alcohol exposure and childhood atopic disease: a Mendelian randomization approach. 胎児期のアルコール暴露と小児期のアトピー性疾患：Mendelian ランダム化法		
執筆者		
Shaheen SO, Rutterford C, Zuccolo L, Ring SM, Davey Smith G, Holloway JW, Henderson AJ.		
掲載誌		
J Allergy Clin Immunol. 2014 Jan;133(1):225-32.e1-5. doi: 10.1016/j.jaci.2013.04.051.		
キーワード		PMID
妊娠 母親 アルコール暴露 胎児 小児期		23806636
要 旨		
目的： 西洋の妊娠中の女性においてアルコール消費は特別なことではなく、子供の小児期のアトピー性疾患のリスク因子となりうる。しかしながら、アルコール摂取に関する報告は信頼性が低く、関連性に関する報告はまちまちな結果であったので検証した。		
方法： バイアスと交絡因子を最小限化するために Mendelian ランダム化法を大集団出生コホート研究に適用し、胎児期のアルコール暴露とアトピー性表現型の関連について検証した。ALSPAC(Avon Longitudinal Study of Parents and Children)研究に参加した白人の母親と子供において、母親の妊娠期のアルコール消費に関する申告と子供が 7 歳になった時のアトピー性疾患(喘息、ぜん鳴、枯草熱、湿疹、アトピー、IgE(免疫グロブリン E))の発症との関連を検証した。さらにこれらの子供のアトピー性疾患発症とアルコール・デヒドロゲナーゼ(ADH)1B の遺伝子型(rs1229984)との関連を検証した。A 型対立遺伝子は早い代謝とアルコール消費の減少、飲酒者ではエタノールへの暴露量の減少と関連がある。		
結果： 交絡因子調整後の妊娠後期における母親のアルコール消費の申告内容は子供の喘息と枯草熱に対して負の関連が確認され、アルコール摂取のカテゴリー上昇毎の調整後オッズ比はそれぞれ 0.91[95%信頼区間 0.82-1.01]と 0.87[95%信頼区間 0.78-0.98]であった。しかしながら A 型対立遺伝子のキャリアと G 型対立遺伝子型のホモ接合の比較において、妊娠期中の ADH1B 遺伝子型は喘息または枯草熱との関連が無かった(オッズ比はそれぞれ 0.98 [95%信頼区間 0.66-1.47]、1.11 [95%信頼区間 0.71-1.72])。また妊娠期中の ADH1B 遺伝子型はその他のアトピー性疾患とも関連が無かった。		
結論： 胎児期のアルコールへの暴露が小児期の喘息やアトピーに対するリスクを増大させることを示唆するエビデンスを見つけることはできなかった。		